

ゲーテの宇宙あるいは普遍性

平野篤司

1. 『若きヴェルテルの悩み』¹

ゲーテは、エッカーマンに向かって、自作『若きヴェルテルの悩み』(1774年刊)について、老年の現在(1824年1月2日)では敬遠すべき作品だという。もちろん若気の至りなどというのではない。エッカーマンから指摘を受けた、ロッセがアルベルトに黙ってピストルを手渡す場面について、モチーフの展開の十分説得的でない点を認めてはいるが、決して年齢とその後の経験によって乗り越えられたものとは見ていない。むしろ、その作品の生命の強烈さに恐れをなしているほどだ。ゲーテは、その事情について次のように語っている。

この作品は出版されてからただ一度しか読み返していない。その後二度と手に取ったりしないように警戒しているほどだ。これは、打ち上げ花火にほかならない。それに触れれば不気味だし、この作品の源泉である病的な状態をもう一度感受し尽さなければならぬことを恐れるのだ。²

ゲーテがロマン主義的なものを病的と呼び、古典的なものを健康的なものとして対置したことはよく知られている。ゲーテはロマン主義的なものは近代的であって、弱く、病的であるというので、彼のそれに対する評価は、強く健康な古典主義のそれにははるかに及ばない。そもそもこの言辭は、ロマン主義を批判するためになされた一種党派的なものでもある。³ゲーテにおいてロマン主義的なものの出番はないともいえるであろう。しかし、この『ヴェルテル』こそロマン主義的なものであった

のではないか。古典主義作家ゲーテは、自らのうちに多分にその要素をむしろ基盤として抱え込んでいたということが、かれのロマン派に対する批判的態度となったのではないかと考えることはできないだろうか。その精神的姿勢は、自分のうちに深く内在するものに対する、あるいは自分自身に対する批判であったともいえよう。そうであればこそ、彼の批判は、ロマン派の自己批評よりも鋭敏なのだと考えられる。他者を批判するためにはそれは自己批判でなくてはならない。内在的な批判である。批評文学といえば、フリードリッヒ・シュレーゲルを筆頭とするロマン派の俊英たちの最も得意とする領分であるが、実は彼らはこの点でもゲーテの後塵を拝さなければならなかったのである。ただ、その違いは、ロマン派がこれを旗印として掲げ、実践したのに対し、抽象論の嫌いなゲーテは、より内在的に、より具体的に展開したというところにあった。

ゲーテは『ヴェルテル』を否定したのではなく、その作品世界のありようを彼なりのやり方で批判的に批評したのだということができよう。先の引用部の彼の言及は、自らの身に沿わせて作品の根本を指摘し、文学の深淵を垣間見させる驚嘆すべき批評の言語であると思う。この作品の原動力は、社会的には許容されぬ禁忌を犯すという主題にある。この問題を作者ゲーテは果敢に造形化した。その根源的な造形性は、原作者をもそう易々と原点に立ち戻らせはしない。原作者といえども作品に接するときには、読者であるのだから、接点に触れた際には、根源から発する火焰を身に受けなければならない。それをすでに経験している者がおいそれとそこに立ち返ろうとしたくないというのは、生身の人間の意識としては当然のことではないだろうか。古典作品に接するということが、市民的教養として読者を豊かにするというような命題があるとすれば、それを素朴に唱えることは不見識なことでもあるのだ。読者はこのような作品から発する火に身を焼かれるような経験をすることで、世界の認識は深化されるだろうが、市民的安寧は無残にも破られることだろう。

このように見てくれば、この作品が1770年代におもにドイツで荒れ狂った精神運動、疾風怒濤の時代風潮に共振し、その後フランス革命の時代を迎えるヨーロッパ規模の動乱の先駆けともなったということに何の不思議もない。エッカーマンを相手にゲーテはナポレオンとの会見のエピソードを披歴しているが、もちろんナポレオンがゲーテに会うことを求めたのである。それに、その会談の話題として、あの『ヴェルテル』があったのだ。この世界的にも大ベストセラーとなった『ヴェルテル』は、約束事により維持されていた既存の世界を根底から揺さぶる発火点の一つでもあったのだ。19世紀の貴族階級はもとより、市民の生活のありようまで顛倒させかねない衝迫性を持っていたのである。

しかし、ここで文学作品をただ単に時代の産物と考えることには留保をつけておきたいとおもう。それは、ゲーテ自身の文学観と歴史観にそぐわないからである。

さしあたり、ゲーテの自作に対する批評をめぐるこの問題を一般的に文学という営為に収斂させておこうと思う。文学とかかわるということが、様々な面で人々の認識の枠組みを揺り動かし、それを更新させるといふ点に注目すれば、新しい世界の体験に通じるということでもあり、生身の人間としては、残酷なまでに深い経験を意味するであろう。それが、人々に幸福な展開となるか、それとも不幸なものとなるかは見通すことはできないが、人々にとって既存の精神的な枠組みが変化せざるを得ない経験だとすれば、それは象徴的に死と再生と読み替えてもよい。そこであえて死という過程に重点を置くならば、とりあえずは不幸とっておいた方がよからうと思われる。それを乗り越えていくことができるかどうかは次の段階である。

作者ゲーテが生身の人間として苦しみ悩んだことに変わりはない。だからこの作品は、『若きヴェルテルの悩み』(Die Leiden des jungen Werther)なのである。悩みという言葉の原語は、Leidenであるが、これは苦悩や痛みを表すが、言葉のものと意味は身に受けた痛みということ、すなわち受難である。ちなみに Leideform といえは、文法用語とし

ての受身形、受動態を表す。⁴ここで、ゲーテの疾風怒濤時代（1770年代）の作『冬のハルツ紀行』という詩を引き合いに出すことは有益であろう。なぜなら、この詩において描写される若者の姿は、ゲーテその人でもあろうが、同時に彼とかかわりを深く持った若き異才レンツ（Jakob Michael Reinhold Lenz 1751-1792）のことを考えさせずにはおかないからである。詩人は、世界に対するあまりにも鋭敏な感受性を持ったために現実を呪詛し、精神を病んだ若き魂に対して決して冷淡ではない。むしろ彼を慈しみ、深く同情（ドイツ語では、強いて言えば共苦というような意味になる Mitleid にあたる）を寄せているのである。

ああ、だれがこの者の痛みを癒すというのか、
慰めの香油が彼には毒となった。
あふれる愛から人間憎悪を飲んでしまった。
まず辱められ、そして軽侮する者となり、
満たされぬ自己探求のうちに
自分自身の価値を
ひそかに食い尽くすのだ。

これに続く詩篇後半は、ほとんど宗教的な祈りの詩句であるといってもいいだろう。

慈愛の父よ、あなたの詩篇の
ある音調が
その耳元に届くものであれば、
彼の心を蘇らせ給え。
砂漠の中で
喉乾く者の傍らにある
百千の泉を見渡すべく
彼の曇った眼を見開かせ給え。⁵

ゲートは、共感と受容能力においても天才であったのだ。このように切実な感情から生まれた作品は、その表現の成熟度が高ければ高いほど、危険性をはらむものとなる。生身の人間が経験するのではなく、作品という形式に昇華されたものではあっても、それが生きた世界を喚起するならば、作者にとってさえ、近寄りがたいものなのであろう。不用意に接すれば、埋もれ火から火焰を掻き立てかねない。ゲートの『ヴェルテル』に対する恐れにも似た敬遠の態度はこのようなものであったのではないだろうかと思像する。

ゲートは、『ヴェルテル』について次のように語っている。

これは、私がペリカンのように自分自身の血をもって養い育て上げた作物だ。そのなかに私の胸から湧きでた内面的なものや感情や思想がたくさん詰まっていて、それはおそらく十巻本の長編にもなるほどののだ。⁶

これが単に若書きの故の未熟さや性急さについての反省からくるものとは到底思えない。また、若い時代の産物がのちの成熟期や老年期のものによって乗り越えられたとも思われない。それにしても、ゲートの自作に対する表白は、切実かつ生々しすぎるのである。むしろ、それは、彼のいうデモーニッシュなもの（*das Dämonische*）⁷の表出であって、それが造形されたことに対する自らの驚きと敬意と考えられよう。エッカーマンが指摘した小説としての動機付けの不足はあっさり認めていて意に介していない様子であるし、エッカーマン自身が一番強く興味をひかれたナポレオンとの会見の際のナポレオンによるこの作品の弱点の指摘の箇所についてもそれがどこかということをあえて明かしていない。エッカーマンは不満だったに違いない。しかし、ゲートにとっては、そのようなことよりもナポレオンというデモーニッシュな存在が彼の作品に共鳴し感激したという事実のほうがはるかに重要であったのだ。

2. 個人性の強調と普遍性への志向

エッカーマンとゲーテの『ヴェルテル』をめぐる話は、さらにゲーテを見る別の観点を浮上させている。それは、例によってエッカーマンからの問いかけで始まる。

エッカーマンは、この作品が引き起こした大きな反響とは一般によく言われているように時代に根差したものととらえてよいものかという文学史的な疑問を呈するのだが、ゲーテのほうはそれには必ずしもくみしないというのである。エッカーマンの考えもはなから痛快なほどに明快である。自分でもう初めから正解を用意して敢えて問いかけるかのようなのである。

この『ヴェルテル』が期を画したのは、それが世に出たからであって、ある特定の時代に出たからではありませんね。⁸

さらにこれに続いてエッカーマンは次のように語るのである。

どんな時代にも表に出されない苦悩、ひそかな不満足や厭世観というものがたくさんあり、個々人のなかに世界に対する不如意、またその自然性と市民的諸制度の葛藤がたくさん生じるのですから、『ヴェルテル』がかりに今ようやく世に出ることになっても、やはり画期的なことだったでしょう。⁹

このエッカーマンの主張にゲーテの反論があるはずもない。これは、二人の対話を後になってエッカーマンが編集したもので、彼のいわば『詩と真実』なのであり、彼の文学なのである。¹⁰ さらに言えば、エッカーマンはゲーテの真実をその口から語っても構わないのだ。それほど、エッカーマンのゲーテとの一体感は目覚ましい。これは、対象への愛着

がなさしめた稀有な一体感である。ロマン派のように自我を強烈に表出することではなく、敢えて言えば自己滅却することによって、余人には及ばぬ成果を達成したのだ。また、逆にゲートはこのような共鳴体を得ることによって、自己を語り得たともいえるだろう。新約聖書においても福音は、使徒という語り手たちによってはじめて伝えられたのであろう。かれらがいなければ神の教えは、人々に届くことはない。ゲートは、エッカーマンにおいて最良の語り手を得たといってもよい。彼は、次のように語っているのだ。

本当に才気があって博識な人もたくさんいるが、かれらは往々にして虚栄心が強い。世間的なものに惹かれてやまない民衆からそのような才人とちやほやされたいばかりに、恥も外聞もかなぐり捨ててしまう。この人たちには、聖なるものなど存在しない。…（中略）…
人はこの世のあらゆる問題を解きほぐすために生まれてきたというわけではない。問題の手がかりが奈辺にあるかを探り出して、その先は理解が届く範囲に自己限定しておくべきなのだ。¹¹

その意味で、エッカーマンはこれ以上望むことが不可能なほどの使徒となり得たのだ。もちろんここではゲートの言説はエッカーマンの手になるもので、そのすべてが彼によって絡めとられているということも確かなことであろう。しかし、エッカーマンはゲートと一体なので、ゲート以外のものがそこに入り込む余地はない。この対話の読者は心安んじてゲートの発言を受け取ることができるのだ。しかし、一方では、ゲートの発言の強さがエッカーマンの語りの水準を超えることもある。エッカーマンといえども、いや彼だからこそというべきか、原石の輝きをそれ自体として差し出さざるを得ない場面もあったのではなからうか。これにはむしろその輝きが枠組みを破って差し出でているといった方がふさわしい。先のエッカーマンの問いかけに対して、ゲートの発言は当初穏やかに応じ、次第に熱を帯びてくるのである。

君の指摘はおそらく正しい。それだからこそ、この書物は当時と同じく今でもある青春期の年齢の若者たちには感化をもたらしている。それに私固有の青年期の憂鬱を私が生きてきた時代の一般的な影響や、個々のイギリスの作家たちの書いたものを読むことから引き出しに行くには及ばなかったのだ。それはむしろ、私的で切実な問題であって、それは焦眉の急であり、それと格闘せざるを得なかったのであり、それこそがわたしを、ある心情へと投げ入れ、そこからヴェルテルが生まれてきたのだ。そう、私は生き、愛し、大いに苦悩したのだ。それが核心だ。¹²

『ヴェルテル』の主題であり動機であるものが外側から到来したのではなく、作者固有のものが作者を突き動かしたということだろう。かつて詩人は、次のように歌っていたではないか。

ああ、希う、内なる創造の力が
私の感覚を貫いて鳴り響かんことを！
果汁で満たされた形成物が
私の指の間から湧き出でくることを！（『芸術家の夕べの歌』から）¹³

ゲーテに言わせれば、作者固有の内的な動機が作品を生み出し、それがほかの若者たちに、そしてその時代に影響を与えたということになる。疾風怒濤の時代がこの作品を生み出したのではなく、むしろこの作品こそがその時代を形作ったというべきなのであろう。大変な自負である。しかし、文学作品の生成ということを作者の側に立って冷静にみれば、それは事実に基づいたある客観的な課程に他ならないということもできる。ゲーテにおいて重点はあくまでも歴史性や一般性ではなく、個性に置かれている。

しかし、この個性がそれにとどまるのではなく、一般性ではなく普

遍的なものに達するというパラドックスがゲーテにおける創造行為の核心にある。次の議論に耳を傾けよう。

いわゆるヴェルテルの時代というのは、よく見ればわかるように明らかに世界文化の歩みの一部をなすものではなく、自由な自然の感覚を生まれつき備えている個々人がそれぞれに古臭い狭苦しい世界に束縛されていることを知り、それに沿わせて生きることを求められる時の生の歩みを担うものなのだ。阻害された幸福、阻まれた行動、満たされぬ願望などというものは、特定の時代の欠陥ではなくて、個々人の問題なのだ。だから、だれもがその生涯に一度も、『ヴェルテル』があたかも自分のためにのみ書かれたものであるかのように思われる時期を持たないとしたら、良くないことだろう。¹⁴

ゲーテは、ここで生じる人生の問題を社会的あるいは歴史的な脈絡と文脈に置くことはなく、個々人のだれもが通過する青年時代という普遍的な枠組みの中で考えようとしているように見える。しかし、これを内面性と自我に物事を収斂させようとするロマン主義の世界観からは区別しなければならない。いかに古臭くともゲーテにとって外界という世界は厳として存在することをやめないからだ。フィヒテのいう絶対自我ほどそれから縁遠いものもないだろう。ゲーテは、ロマン主義批判として次のような語るのである。

これ（主観的傾向）を克服するのは並大抵のことではない。だが、勇気だけはしっかりと保ち、速やかに決断するのだ。…（中略）… とるに足らない主観を吐露している限りでは、詩人などといえたものではない。しかし、自分のものとして世界を表現できるようになれば、すでにその人は疑いもなく詩人だ。…（中略）… 意義深い努力とは、内面から発して世界へと向かうことにあるのだ。¹⁵

さらに注目すべき点は、かれの歴史観の同時代における特異さである。それは、自然的変動は別にしても、変革や革命などを含む歴史の変動を通じて人間世界は、そして人間存在はそれほど変わらないというものの見方である。彼が、人間の青春時代の普遍的な在り方を主題にするのもそのためである。これは、突き詰めて考えれば、個人においても、また社会としても、人間の変化、ましてや進歩などということは本質的に起こらないということだ。

ゲーテの時代（1749年生まれ、1832年没）の時代というのは、まさにヨーロッパ規模で見ても、あるいは世界規模で見ても変革と革命の時代だったということを背景としてみれば、驚くほど反時代的な考え方ということにもなる。ゲーテは彼の時代との対峙の仕方を次のように総括している。

私の生きてきた時代は、徹頭徹尾私に逆らってきた。というのも、時代が全面的に主観的な志向を強めていたにもかかわらず、私は客観的な仕事に専念していたからだ。この点でシラーは、私よりはるかに有利だった。¹⁶

特にロマン派のゲーテに対する反発は、この関連においても考慮に値する。フリードリッヒ・シュレーゲルやノヴァーリスが、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に感激したかと思えば、やがて間もなく、『遍歴時代』には距離をとるばかりではなく、裏切られたというような感情さえ抱いていることなどどのように受け止めればよいのか。¹⁷かれらは前者においてゲーテのなかに、現実を超える詩的な世界の実現を認めたのだが、後者において現実の超克どころか、現実との妥協と諦念の世界を見てしまったのである。

だが、あくまでこれは初期ロマン派の見方であって、ゲーテは、そもそも精神において現実を超えようなどとは思っていないのである。現実生きることこそ彼のもっとも大事な課題であったはずである。現実を

そのまま肯定するというわけではないにしろ、現実が世界であって、そこでよりよく生きていくということが最重要の課題なのだ。しかし、彼によればそれにかかわるのは個々の人間であって、集合的な社会ではない。この点を突いてゲートに反旗を翻したのがハイネをはじめとする後期ロマン派の若い作家たちである。ハイネはゲートの訃報を受けてイロニーを含みながらも喝采を叫んで、これでようやく芸術と詩的文学の時代は終わり、新しい文学の時代すなわち政治の時代が始まったと確認している。¹⁸ いわゆるゲート時代の終焉である。「ここで個人の精神は終わり、万人の精神が始まる」というあるフランス人ジャーナリストが残した時代の宣言を引用しながら、ハイネは新しい時代の到来を確認している。¹⁹

だがしかし、ゲートはいかなる批判にもかかわらず、超然と、しかも現実を生きてきたのだ。彼はそもそもそのような時代の移り変わりさえ認めてはいないかのようである。このようなゲートの姿勢を歴史的感覚の欠如と呼ぶことは可能である。それは確かに批判の対象ともなるだろう。しかし、そうであれば今度はロマン派の俊英たちが分かち持っていた歴史主義といったものがいかなるものであったかということが改めて問いただされなければならない。この歴史主義が近代の産物であるとすれば、その推進力は、進歩の観念である。たとえばヘーゲルの1820年代から1830年代にかけて行われた講義録をもとにまとめられた『歴史哲学講義』²⁰ などによれば、歴史は人間理性の不断の自己展開を通して神の理性の発現に至る道筋とするものである。それには、個人が他者との出会いと葛藤を経て、高次元の自分を見出すという過程を永続的に続けていくことが求められる。これは理想主義的な色合いを濃く帯びた前進的思想である。啓蒙主義とロマン主義に先導された近代の歴史主義は、宿命的に進歩の観念と結びつきを持っていた。その特徴は、合目的性、法則性、抽象性そして何よりも一般性にあるといえよう。これを担っていたのがドイツロマン主義であり、観念論哲学である。ちなみに、ヘーゲルはたびたびワイマールのゲート宅に客人として招かれており、その

談論における精神の澁刺としたところ、またその人柄をゲーテに愛され、気に入られているのだが、肝心の弁証法的を中心とする哲学的思考は、ゲーテの好むところではない。そもそもゲーテは、多様かつ不可思議なこの世界を一つの理念に収斂させようという論理的思考には少しも共鳴を覚えないのである。これらのことは、エッカーマンが詳細に書き留めている。

ゲーテは、このような観念の世界をはるかに超えたところで生きていたのだ。それは、一般的でも、抽象的でもない、極めて普遍的な、しかも具体的な現実の世界だったのだ。それは、全体的な人間の生きる場に他ならない。たとえば、『マイスター』について、作者自身次のように語っている。

この作品は、何はともあれ最も測りがたい作品の一つであって、私自身でもそれを解明する鍵は持っていないくらいだ。中心点は何かと人は探ろうとするが、それは困難だろうし、賢いやり方とは到底思えない。我々の目の前を通り過ぎる色とりどりの豊饒な人生も、仮にそこに明確な傾向性が見られないとしても、それ自体何かの価値があると考えたい。言葉において表わされる傾向性などというものは、頭で拵えあげたものでしかないのだから。²¹

『ヴェルテル』についても、ゲーテは疾風怒濤の時代の産物という見方ははっきりと退けている。作品を腑分けしてある特定の時代に還元することはできないということだ。それは、それ自体で一つの命を持った有機体を成しているということであろうし、それになによりも人間の普遍的なものを志向しているからである。このようにゲーテの創造世界においては、個別的なもの、個人的なものがおのずから普遍的なものを表してしまうという一種の象徴空間が開けてくるのである。文学作品がこうしたものだとなれば、それは古今の時空、東西の広がりを超えたものとして人々にかかわるものとなる。ゲーテが世界文学という概念を提唱

しているが、そこには比較文学的問題提起と並んで、このような広大な象徴空間の構想があったのではないだろうか。古今東西の古典はそのようなものとして多くの人々に読み継がれてきたのではないか。²²

ロマン派は、まさに歴史の中の現下の焦眉の急に迫られて、ゲート風の全体性、普遍性は不可能なもの、疎遠なものとして遠ざけ、断片的なもの、理念的なものに超越的なものを見ようとした。ベンヤミンが指摘する、ゲートの側の象徴とロマン派の側のアレゴリーの対比にあたるものではないか。ロマン派の思想は、ヘルダーリンなどは別として、いくらか超越的なものを呼び出そうが、あくまでも人間精神の内部での出来事であるのに対して、ゲートのそれは、人間はもちろんのこと、それを取り巻く自然、果ては宇宙にまで及んでいる。彼の自然研究もその一環であろう。「すべて移ろいゆくものは、比喩に過ぎない」²³という『ファウスト』の終幕にある詩的命題もこのような人間と宇宙の織り成す象徴空間において考えるべきことなのだと思う。

彼は自分の過去を振り返って次のような感慨も漏らしている。シラーとともに劇場監督の仕事に没頭したので、作家活動が制限されざるを得なくなったことについて次のように語っていて、それをそれほど残念とは思っていなかったようである。

もちろんその間にすぐれた作品をいくつか仕上げることも可能だろう。だがよく考えてみれば、そんなことは後悔するには及ばない。私は自分の活動のすべてを、絶えず象徴的にのみ捉えてきたのだから、壺を作るかあるいはまた皿を作るかなどということは、とどのつまりどうでもいいことだったのだ。²⁴

ワイマール宮廷における行政上の仕事も、自然研究も、文学上の創造行為も、演劇活動も、社交も、恋愛三昧も、家庭生活も、ほとんどあらゆる活動がそれに結びついていたのだ。だから、その中でどの活動が主であり、どれが従であるということもなかったのかもしれない。彼は

エッカーマンを相手に、宮廷での些事がなければ、戯曲の数十本も書いていたかもしれないが、どのみち同じ事だったろうとも語っている。移ろいゆくものは、比喩に過ぎないということは、移ろうもののむなしさを意味しない。人間にとってそれはかえって貴重な足場となるからである。我々が生きるのは、そのときそのときで今ここという現実を措いて他にはないからである。人がそこでできることは実につつましいことではないかもしれないが、それを着実に形成することによって、かえてこの世界の広がりを感じることができる。かれは、「人が達しうる最高のことは、驚異を感じることだ」²⁵（1829年2月18日）というが、人ができることというのは、この現実生活においてなしうることなのであり、そこではじめて持ちうる感慨なのである。ここでゲーテの詩『人間の限界』の末尾を見ておこう。

小さな輪が
われらの生を限界づける。
しかし、多くの世代が持続して連なり、
その存在の無限の鎖をなす。（『人間の限界』）²⁶

有限の人間存在が確実な輪を作ることが次の輪に連なり、このプロセスを持続的に積み重ねるということで、ついには無限の鎖を形成するという思想が見事に造形されている。無限の鎖とは、ほとんど神の領域である。しかも、人間は神に比べられるべくもなく無力で卑小な存在であるという認識が、その前段において縷々と語られているのだ。おそらくここには人間独自の課題がパラドックスとして提示されているのだ。限界づけられた小さな存在には、独特な方法が残されていた。すなわち、人と人、世代と世代が輪としてつながりあい、鎖を形成するというやり方である。詩人は、『神的なもの』という歌において、「我々は皆、永遠の強固で偉大な法則に従って、我々の存在の輪を完成させねばならぬ」と要請しているだけでなく、力強くも次のように、断言している。

ただ人間だけが
不可能なことを成就できる。
…（中略）…
人間は瞬間に
持続を付与できる。

この詩の最終連は次のように歌われている。

高貴な人間は
人を助くこと惜しまず、善良であれ！
たゆみなく為すべし、
有用なもの、正しきものを。
我らに対しては手本たるべし、
かの予感される者たちの。（『神的なもの』）²⁷

これはすでに人間存在の小ささ、卑小さを嘆く歌ではない、まさに人間の小さいが故の偉大さを高らかに謳いあげているとあってよいだろう。しかしこれは、決して弁証法的転回の世界ではない。これこそが神の似姿としての人間なのである。ゲーテのこの考えは詩行として極めて論理的に緻密に形成されているが、やはりそのパラドックスには驚嘆を禁じ得ない。

しかし、ここには歴史主義あるいは進歩主義的な面は窺うことはできない。ゲーテの人間観察のパースペクティヴは、特にロマン派のそれとは比べられないほど広いので、その中で実際に人々は動いている、それも活発に動いているにもかかわらず、世界があたかも静止状態にあるように見えてしまうのであろう。

たとえば、フランス革命からナポレオン戦争に至るヨーロッパ激動の時代に、特に対仏解放戦争に際して同朋から「我々が命がけでフランス

人どもと戦っているときに、あの人 (=ゲーテ) はエルフルトでナポレオンに儀礼的に謁見している」²⁸ などと揶揄されたりしているが、おそらくゲーテは、このときナポレオンにおけるデモーニッシュなものを見定めていたのだ。このような指摘に対してゲーテは次のように応じている。

猫も杓子も同じように、祖国に挺身することはできないのだ。各人が神の定め給うたところに従い、それぞれに最善を尽くせばいいのだ。私は50年来弛まず全力で仕事に努めてきた。私に自然が定めた目標に向かって夜も昼もなく、倦まず弛まずいつも全力で励んできたし、研究をしてきた。できるだけのことをやってきたといえよう。各人がそれぞれに自分についてこう言えればよいことだろうが。²⁹

自らの人生に対する大変な自負の念の表明である。だが、おそらくゲーテは自分自身に対しても極めて謙虚なのだ。ある意味で自分のことが客観的に見えているのであろう。このように自負と謙虚さが一体になっているところにゲーテの独特な自己観察がある。それとともにそこで語られることがらは、普遍的なものを語りながら同時に彼の世界観に他ならないという驚くべき認識が展開されているのだ。

3. デモーニッシュなものとのつながり

この普遍性への志向とともに、ゲーテがこのような巨大な、また膨大な仕事を成し得た巨人にして自分の存在をささやかな地上の一点としてとらえ、それが創造的な、生産的な活動を行えるのも、自分の主体的、意識的なものの働きというよりもむしろ、外部のもの、あるいは個人存在を超えたものの力としてとらえていることに注目したいと思う。それは、彼がしきりに唱えるデモーニッシュなものにつながるからである。次のように彼は語るのである。

どんな至上の産出力、偉大な創意、発明、成果をもたらす思想も、人の思うようにはならないのだ。それはこの地上のすべての力を超えている。ひとは、このようなものを、天からの予期せぬ賜りもの、まさに神の子として感謝の念をもって受け取り、尊重しなければならない。というのも、それは人を圧倒的に操るデモーニッシュなもの、人は主体的に行動していると思ひ込むだろうが、実は当人も知らないうちに身をささげてしまうデモーニッシュなものに似ているからなのだ。このような状態で、人はこの世を統べる神の道具、神からの力を受けるにふさわしい受容体とみなされるのが至当である。こんなことをいうのも、ただ一つの考えのために何百年もの間に世界がすっかり変貌してしまうことがあったかと思えば、2、3人の人々が彼らの作り出したものでその時代に刻印を押し、さらにそれが消え去ることなく次の幾時代にも受け継がれ、素晴らしい影響を与えることがあると思われるからだ。³⁰

ゲートは、エッカーマンとの話の中で、何度も繰り返し「世界は、いつも変わらず同じままだ」という感慨を述べている。だが彼の生きた時代は近代が産声を上げ、成長し、この世の主流を形成する変革と動乱の世界だったはずである。ゲートももちろん時代の力ということを知っている。シェイクスピアの出現はまさに時代が後押ししたということも指摘しているし、ナポレオンも時代のデモーニッシュなものに駆り立てられたと見るのもゲートその人である。それに彼自身の手になる『ヴェルテル』がやはり疾風怒濤時代の刻印を受けていることは紛れもない。それならば、なぜ彼は、世界の不変と同一性を言っているのだろうか。

それは、彼がおそらく世界に起こる様々な事象を、普遍的なものを見ることのうちに位置付けようとしていたからであろうと思われる。たしかに、社会は変わったはずである。しかし、人間を全体的に、また内面的に見るとき、そこには変化を含みながらも不変にして普遍の層が現れ

出ると考えるべきではないだろうか。

4. 制限された自己と開かれた世界

世界はいつも変わらず同じだ。諸状況はすべて繰り返される。ある民族が生き、愛し感じることはほかの民族と変わらない。なぜある詩人がほかの詩人と同じような詩を書いてはいけないだろうか。生活の諸事情は相似たものなので、なぜ様々な詩の状況も似たものになってはいけないだろうか。³¹

ゲーテはエッカーマンと連れ立っての夕方の散歩の際に日没を眺めながらしみじみと感慨を述べている件がある。

ゲーテはしばらく物思いにふけていたが、やがて私に向かってある古人のフレーズを述べた。すなわち、「太陽は、沈みつつも依然として同じ太陽のままだ」と。³²

ゲーテはそれに続けて死についての思いを語っているが、この光景がよほど印象的であったのだろう。自らの人生観と世界観を語っている。

「私は、我々の精神が誠に不滅のものであるという確信を抱いている。それは永遠から永遠へと絶え間なく働き続け、太陽に似て、我々地上の者の目には沈むかと見えるが、実際は決して沈むということはなく、絶えずひかり輝き続けているのだ。」そうこうしているうちに日はエッターの山並みの背後に沈んでしまっていた。³³

この一節などエッカーマンが書き留めた生けるゲーテの詩そのものではないかと思われる。そしてこれは、詩人自身が唱えていた機会の詩の概念の優雅な具体例といえるだろう。機会の詩とはゲーテによれば、次

のようなものとして提示されていく。

世界は広大で豊かだし、人の生は実に多様なものだから、詩のきっかけになるものに事欠くというようなことはない。だがしかし、詩はすべてからく機会の詩でなくてはならない。すなわち、現実の世界が詩作のためのモチーフと素材を差し出すのでなければならない。詩人の手によってこそ、ある特定の状況が、普遍的なもの、つまり詩的なものとなるということだ。私の作った詩は、すべて機会の詩だ。それは、現実によって刺激を受け、そこにこそ根拠と基盤を持つ。³⁴

現実的な契機を詩的なものに転ずるということは、普遍性へとつながっていく。ゲートの目指す詩的な普遍性の世界は法外に開いたものである。ゲートのこの認識はさらに文学作品の開放性という主題へとつながる。バイロンが『ファウスト』のメフィストフェレスを借りて悪魔を仕立て上げても、ウォルター・スコットが『エグモント』の場面を取り入れたり、ミニヨンに倣った登場人物を作ったり、さらにはゲート本人がシェイクスピアの歌をメフィストフェレスの歌わせるといようなことは、ゲートにあっては問題的なことがらどころか、むしろより良き作品を作るという観点から積極的に評価されることとさえなっているのである。ゲートは、次のように言うのである。

シェイクスピアの作ったものが、その場に合っていて、言わんとしているものをまさに的確に言い表しているのなら、なぜ自前のものを作り出すべく私自身が骨を折らなければならないのだろうか。だから例えば私の『ファウスト』の天井の序曲がヨブ記のそれと類似点があるとして、それはまた極めて結構なことであって、私はそれゆえに非難される筋合いのものではなく、むしろ褒められてしかるべきものだ。³⁵

ここに窺えるのは、人が一人で独創的なものを創造するというような、

ロマン主義的な考え方ではなく、地上の人々が太古から営々と努力して築き上げていく鎖のごとき文化の形成物であろう。ここであらためて、『人間の限界』を振り返ってみるべきであろう。しかし、特にエッカーマンを相手に種々のことがらを語っていた晩年のゲーテは、極めて大胆に率直に自らの世界観を開陳している。たとえば、彼は次のように話すのである。

我々が自分たちの思うままに振舞っていると思うかもしれないが、とどのつまりは皆全体としてあるのだ。純粹に自分たち固有のものだといえるものは誠にわずかだ。我々は、だれでも以前に生きていた人々、そして我々とともに生きている人々から受け止め、学ばなければならない。いかに優れた才能といえども、なにもかもが自分の功績であると思うような人は、それ以上の進歩はないだろう。しかしながら、とても善良な人々もこれに気づかずに、独創性という残骸に翻弄されて、その人生の大半を暗中模索しているというありさまだ。³⁶

私は、自分の書いた作品を決して自分だけの知恵に負っているとは思っていない。素材を与えてくれた人々、私の周りにあった無数の事柄と人々のおかげだとも思っている。³⁷

つまり、自分自身で何を獲得したか、他者から何を獲得したかというような問い、また独力で活動するのか、または他者の助けを得て活動するのかというような問いも愚問だ。大事なことは、立派な志を持っているか、そしてそれを成就するための技能と忍耐の力を持っているかどうかなのだ。それ以外のことはどうでもいい。³⁸

ゲーテが開かれた世界、さらにいえば普遍的世界を志向していることは確かなことだろう。しかし、ここで注目すべき点は、ゲーテの志向する普遍性は、その構成要素が決して合理的に整然と相互に調和する

世界ではなく、見通しが見つからないほど多様であり、そのさまは雑多という言い方がふさわしいということだ。これは、人間現象についてももちろんそうだが、地上の人が見た時の自然や宇宙のありようとも通じるものだろう。そして、この普遍空間に働く力は、ゲーテの語彙でいえばデモーニッシュなものということになる。これは人の理性や感情でとらえきることのできるものではない。ここで、ゲーテのいうデモーニッシュなものを概観しておきたいと思う。

エッカーマンがまとめているところでは、「言葉では言い表し得ない宇宙と人の生の謎」³⁹ということだが、これではあまりにも茫漠としてるので、エッカーマンの伝えるゲーテ自身の説明に耳を傾けてみよう。

デモーニッシュなものとは、人の悟性や理性では解明しかねるものだ。(中略) それは、我々の悟性や理性では解明できないものに特に現れる。誠に多様に自然界全体に及び、目に見えるものにも、見えないものにも表れる。⁴⁰

文学には、非常にデモーニッシュなものが存在する。それも無意識なものには特に顕著だ。そのような作品に対してどんな悟性も、理性も役に立ちはしない。しかしだからこそ、それは思いもかけぬ感銘を人々に与えるのだ。⁴¹

それは音楽においてもっとも目覚ましい。それは、音楽はどんな悟性も太刀打ちできないほど高次元なものであること、および音楽からは、あらゆるものを支配する力、だれにも説明できない力が生じるからだ。⁴²

それは、重要人物に現れやすい。⁴³

これは自然界に偏在し、人の状態によって受容され、創造的、有機的なエネルギーでひとを満たす力ということになるだろうか。ゲーテは、

それにとらわれたことを強く感じたのは、彼の創作活動がとりわけ盛んだった時期だといって、戯曲『エグモント』を書いていたところを引き合いに出している。そこでは、作者自身でも制御できない自然的創造力を創作の力に転じることが主題になっている。このデモーニッシュなもの発動が起こる場合は、悟性や理性の世界ではなく、それらを超えた自然や宇宙に通じる領域であるが、それは、近代の個人の脳髓の世界ではなく、限りなく開けた普遍空間であったのではないか。これはゲーテの普遍性志向とも一致するものである。

このような見方を可能とするためには、人において現象する世界を謙虚に、そして丹念に観察し、記述することが求められるはずである。この点で、ゲーテは比類ない受容と持続の天才であった。彼は、自分のできることがいかなる範囲のものであるか、いかなる面であるかということ、すなわち自分の才能とはなんであるかということを知っていたという意味において天才であったのだ。

注

- 1 Die Leiden des jungen Werther
- 2 1824年1月2日（以下、エッカーマンの『ゲーテとの対話』からの引用はアルテミス版をもとにしたDTV版による。引用箇所は年月日で提示する。Johann Peter Eckermann : Gespräche mit Goethe 1976 Deutscher Taschenbücher Verlag GmbH und Co.KG, München
エッカーマン『ゲーテとの対話』（山下肇訳）岩波文庫も適宜参照した。教えられること多く、大変参考になった。
- 3 1829年4月2日
- 4 Duden Das große Wörterbuch der Deutschen Sprache, 1978 München
- 5 Johann Wolfgang von Goethe: Werke Kommentare und Register 1 (Hamburgerausgabe) 1975 München S.50 Harzreise im Winter 1789 作
- 6 1824年1月24日
- 7 この概念をめぐる晩年のゲーテは、しきりに考えを巡らしている。たとえばエッカーマンに向かそれについての集中的な表現が見られる。これについては本論第3節で触れる。
- 8 1824年1月24日
- 9 同上

- 10 ゲーテの自伝『詩と真実』は、現実を基盤としながら、その真実を語るためには文学が要求されるという文学そのものの本質を物語る作品である。ハンブルク版ゲーテ全集のエーリヒ・トゥルンツの注釈（Hamburger Ausgabe 9 S.599 以下）によれば、これが出版当初、『真実と詩』（Wahrheit und Dichtung）という題名になったり、『詩と真実』（Dichtung und Wahrheit）という題名に変更されたりしていることがわかるが、このプロセスは、単に表現の彩ということを超えた文学作品創造の核心を突いた出来事であると思われる。
- 11 1825 年 10 月 15 日あるいは 12 日
- 12 同上
- 13 Goethe : Künstlers Abendlied 1774 年作 Hamburgerausgabe Band1 S.55
- 14 1824 年 1 月 24 日
- 15 1826 年 1 月 29 日
- 16 1824 年 4 月 14 日
- 17 初期ロマン派の理論的支柱であったフリードリヒ・シュレーゲルはこの大変革の時代を特徴づけるものとして、また彼らの導きの星としてフランス革命、フィヒテの哲学書『知識学』と並んでゲーテの『マイスター』を挙げているのである。
- 18 Heinrich Heine: Die Romantische Schule S.360, Sämtliche Schriften 3 1971 München
- 19 同上 S.360
- 20 G.W.F.Hegel: Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte 1837, 1840
- 21 1825 年 1 月 18 日
- 22 ゲーテは、古代ギリシャの文学やシェイクスピアの名を挙げて、古典作品の普遍性を指摘してやまないが、ゲーテ自身の作品『西東詩集』（West-östlicher Diwan）はその目覚ましい実践例といえるだろう。
- 23 Goethe : Faust „Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis“ Zeile 120105
- 24 1824 年 5 月 2 日
- 25 1829 年 2 月 18 日
- 26 Goethe : Grenzen der Menschheit Hamburgerausgabe Band1 S.146
- 27 Goethe : Das Göttliche Hamburgerausgabe Band1 S.147-149
- 28 1830 年 3 月 14 日あるいは 10 日
- 29 同上
- 30 1828 年 3 月 11 日
- 31 1825 年 1 月 18 日
- 32 1824 年 5 月 2 日
- 33 同上
- 34 1823 年 9 月 18 日
- 35 1825 年 1 月 18 日
- 36 1832 年 2 月 17 日
- 37 同上
- 38 1832 年 2 月 17 日
- 39 1831 年 2 月 28 日
- 40 1831 年 3 月 2 日
- 41 1831 年 3 月 8 日

42 同上

43 1831年3月8日